



Title	日本語におけるメタファー的表現の再発見
Author(s)	中田, 一志
Citation	日本語・日本文化. 2013, 40, p. 23-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50773
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

日本語におけるメタファー的表現の再発見

中田 一志

0 はじめに

本稿は平成 24 年 10 月 25 日にインドネシア教育大学言語芸術教育学部日本語教育学科で行った特別講義¹⁾を一部改変したものである。

さて、本稿の目的は、メタファーという人間のとらえ方の一般性、言語によるとらえ方の相違、メタファーの言語現象を概観することである。ヒトや動物が持っているパターン認識能力は雑多な情報から必要な情報だけを抜き出すことが可能で、それにより驚くほど高速な処理が可能であるという。情報処理の分野ではこれを応用して機械にパターンを学習させることによって、大量の音声や画像や文字データなどを高速に処理させているという。それほどパターン認識は高度な処理能力である。ヒトや動物がもつその能力は経験的に学習してパターン化されるのであって、決して先天的ではない。その能力を、洗練し、熟達した能力を獲得するとマイスターの域に達する。メタファーを使った認知もパターン認識の一種だと言ってよい。より複雑な対象をより具体的で卑近なもので表現することでその対象を容易に認知できるからである。したがって、メタファーによる認知も経験的な学習によるものである。経験的に獲得した認知能力であってもマイスターの域に達すれば、先天的な能力と同じく無意識のうちに作用する。そう考えると、幼児の言語獲得期を経た我々はすでに言語のマイスターであり、無意識のうちにメタファーによる言語表現を使っていると予測される。そのようなメタファーの言語現象を概観してみよう。

1 身体部位詞

この節ではある対象のある部分が身体部位の位置、形、機能に類似していると

ということからメタファーによる認知が働き、定型の語となった例を観察してみる。
用例は松本（2000）からの借用である。

1.1 位置の類似性

まず、身体全体に対する身体部位の相対的な位置関係がある対象のある部分と類似している例を見てみよう。

- (1) a. 頭：釘の頭、針の頭、鼻の頭；行頭、文頭、巻頭、年頭
- b. 首：船首、機首、艦首
- c. 尻：矢尻、帳尻、眉尻、目尻
- d. 尾：船尾、艦尾、文尾、巻尾

(1ab) の「頭」「首」は身体の上部を表し、(1cd) の「尻」「尾」は身体の下部を表す語である。(1a) のように日本語では「頭」は「釘」「針」「鼻」のような具体物の頭頂部を指し示すことができるし、「行」「文」「巻」「年」のような抽象物の先頭も指し示すことができる。(1b) のように「首」で「船」「飛行機」「船艦」などの具体物の先頭を指し示すこともできる。一方、(1c) は「尻」が「下部」を表す語の例であり、(1d) は「尾」が最後部を表す語の例である。身体部位の相対的な位置が類似していることからメタファーによる認知作用を経てこのような語が成立したと考えられる。このようにメタファーは身体と「釘」や「船」や「文」などを対応するものと見立て、その部位である「頭」や「首」や「尾」などがそれぞれの部分に対応するといった写像関係であると言い換えることができる。しかし、このメタファー的な写像による定型の言語表現（仮にメタファー的表現と呼ぶ。）は通言語的なものではない。

(2) の用例のなかで、見せ消しのない語はインドネシア語でもメタファー的表現が可能な語であるが、見せ消しの語はメタファー的表現ができない語である。

- (2) a. 頭：釘の頭、針の頭、鼻の頭；行頭、文頭、巻頭、年頭
- b. 首：船首、機首、艦首
- c. 尻：矢尻、帳尻、眉尻、目尻
- d. 尾：船尾、艦尾、文尾、巻尾

インドネシア語²⁾では、(2a) の鼻の「頭頂部」は“puncak hidung”、つまり「鼻の

てっぺん」という表現、メタファーを使わない表現が一般的であり、「鼻の頭頂部」という言い方をしない。抽象物の「行頭」はメタファー的表現が可能であるが、「文」「巻」「年」はそれが不可能で、「最初の部分」というメタファーを用いない表現をしなければならない。同様に (2bc) が示す通り、インドネシア語では「首」で上部の意味を表すことができず、「尻」で「下部」を表すことができない。(2d) の通り、「尾」で「船」や「戦艦」などの具体物の「後部」をメタファー的に表現できるが、抽象物の「後部」をメタファー的に表現できない。数例を見ただけでもメタファーによる認知が言語によって異なることに気づかされる。

1.2 形の類似性

つぎに身体部位の形と類似していることからメタファー的に表現される語について見てみることにする。(3a) は皮膚の一部や金属の部品が「目」のような形状をしているものを指すメタファー的表現である、(3b) も同様にそれぞれ「口」や「足」の形状からのメタファー的表現である。

(3) a. 魚の目、鳩目

b. 蛇口、猫足

メタファーによる認知をもとにして定型の表現が成立するということを、語の意味の側面から見ると、もとの意味から意味が拡張されたということになる。したがって、メタファー的表現の成立は意味拡張を引き起こす要因の一つである。

位置の類似性の語でもそうであったが、そっくりインドネシア語にもメタファー的表現ができるわけではなく、(4) の見せ消しの語はインドネシア語ではメタファー的に表現ができない。このことはインドネシア語にメタファー的表現が比較的少ないということを示しているのではない。

(4) a. 魚の目、鳩目

b. 蛇口、猫足

インドネシア語では皮膚の形状が「魚の目」に似た症状は“mata ikan”、まさに「サカナの目」という表現を用いる。反対にインドネシア語でメタファー的に表現できるが、日本語でそれができない語もある。インドネシア語で「くるぶし」のことを“mata kaki”、「足の目」とメタファー的に表現するのに対して、日本語はそ

れができないという例もある。メタファー的表現はその言語話者の経験の蓄積と密接な関係があるので、言語を取り巻く文化や風土などが大きく影響を及ぼしていると予測される。

1.3 機能の類似性

身体部位が持つ機能と類似した機能を有する対象物がメタファー的に表現される例は次の通りである。

(5) a. ギター／琴の爪

b. のこぎりの歯（刃）

「爪」は「つま弾く」機能を持つが、(5a) のようにそれと同様の機能を持つギターや琴の「爪」に意味拡張されたり、「歯」は「切断」する機能を有するが、(5b) のようにそれと同じ機能を持つのこぎりの「歯（刃）」に意味拡張されたりした例である。「歯」は他に「歯車の歯」や「くしの歯」のように意味拡張されるが、これらは「切断」の機能を持たないので、機能の類似性による意味拡張というより、形の類似性による意味拡張と考えた方がよいだろう。

インドネシア語では(6) のように見せ消しの語のメタファー的表現は不可能である。「爪」は楽器の「爪」に意味拡張できずに、“plectrum”「ピック」というそのものを指す語を用いる。

(6) a. ギター／琴の爪

b. のこぎりの歯（刃）

1.4 複数の類似性

これまで身体部位の位置や形状や機能と類似していることからメタファー的表現が可能で、意味拡張された例を見たが、複数の類似性によるメタファーからなるメタファー的表現も存在する。

(7) a. ランプの首、ボトルの首、手首

b1. 財布の口、銃口、河口、返却口、改札口

b2. 切り口、開け口、宵の口、秋口

「首」は、位置的に「頭に相当する比較的小さな部分と胴体に相当する比較的大

きな部分（あるいは安定した部分）の間にあり、「比較的細くなっている」形状をしており、「頭に相当する部分の向きを変える」という機能を有する。(7a)の語は位置的にも形状的にも機能的にも「首」のメタファーによって成立している。また、「口」は形状的に「空隙」であり、位置的に「空洞部に続く」部分にあり、「出／入り」する機能を有する。(7b1)の「財布の口」や「銃口」は位置的にも形状的にも機能的にも「口」のメタファーによって成立している。「河口」や「返却口」や「改札口」は空洞部の境界は目に見えるものではないが、経験的に川や人や物の流れが筒状の管をイメージさせると考えると、位置的にも形状的にも機能的にも「口」のメタファーである。(7b2)の語彙にはさらに抽象化された「口」が使われている。袋やパックの「切り口」や「開け口」にはもともとはクチ状の部分がないが、それを切ったり開けたりすることによって「空隙」が生じ、そこが「空洞部に続く」部分にもなり、物の「出／入り」の機能も発生するようになる。そう考えると、「宵の口」や「秋口」も同様に、クチ状の部分がないが、それを皮切りに「暗闇」が迫ってきたり、「秋」が深まったりすると考えるとクチの意味拡張として考えることができるのである。

さて、「首」と「口」の意味拡張はインドネシア語ではどうだろう。

(8) a. ランプの首、ボトルの首、手首

b1. 財布の口、銃口、河口、返却口、改札口

b2. 切り口、開け口、宵の口、秋口

(8a)の通り「ランプの首」と「ボトルの首」のメタファー的表現が可能であり、「手首」は“pergelangan”の一語でその部位を指し示し、メタファー的表現をとらない。おそらく「ランプの首」には「照明の主な部分であるランプ」と「それを支える台」を「つなぐ部分」といった、総体としてのランプを構成する役割分担がイメージできたり、「液体を蓄えることが主な機能の部分」と「注ぎ口」を「つなぐ部分」という、総体としてのボトルを構成する役割分担がイメージできたりする場合には、メタファーによる認知が可能なのであろう。それに対して、「手首」は「腕」と「手」をつなぐ部分で、「手」の方向を変えることができる部位ではあるが（さらに手首は比較的細い形状をしているのであるが）、「腕」と「手」と「手首」の総体のなかでの手首の機能・役割は曖昧である。なぜなら「腕」は独

立した機能を持った部位であり、「手」は別の独立した機能を持った部位であるからである。インドネシア語で「手首」を独立した部位として認識されるのは従属先が曖昧であるからだと考えられるのではないだろうか。となると、日本語の「手首」は語構成からして「手」に従属するものと認識されているのであろう。

(8b1)を見るとインドネシア語では川の流れは筒状の管を連想させ、メタファー的表現ができるが、人や物の流れは無理なようである。さらに抽象化したものはすべて(8b2)のように無理である。

2 動詞・法助動詞

前節ではメタファー的写像によって身体部位詞が意味拡張される例を部分的にインドネシア語と比較しながら観察した。別の言い方をすると、モノ（身体）とモノ（ある対象）の間の写像関係の例、いわゆる体言に関わるメタファー的写像のいくつかを見てきた。本節では動詞や法助動詞といった用言について考えてみる。そして、その意味の多義性がメタファー的写像によるものであること、それによる意味拡張によることを確認する。

2.1 知覚動詞の意味・用法

知覚動詞は知覚と認識との間で曖昧（両義的）であるということは一般に知られている。視覚を表す英語の“see”は(9a)では「見る／見える」を意味し、(9b)では「分かる」を意味する。

(9) a. I see the cat on the mat.

b. I see what you mean.

この多義性を Sweetzer (1990) は領域間のメタファー的写像による意味拡張であると解く。(9a)の意味は社会・物理的世界（あるいは現実世界とも呼ばれる。）という領域での主体と客体との関係を表し、その関係性は「主体と客体の間に視覚的に邪魔するものがない状態」といったものである。Sweetzer 氏は(9b)の意味は認識世界という領域で解釈する場合に出てくると考えている。すなわち、認識世界で「主体と客体の間に認識的に邪魔するものがない状態」ということになるだろう。この考えに沿うと、“a clear presentation”や“an opaque statement”や“a

transparent play”といった視覚的な表現が認識的な意味を持つという現象が無理なく説明できる。日本語の場合、英語の知覚動詞ほど広範囲には意味拡張が起こらないのであるが、それでも(10a)のように知覚動詞「見られる」が認識的な意味を持つという例を挙げることはできる。(10b)の「眼力」は「目で物を見る力。視力。」の意味と「物事の善悪・真偽・成否などを見抜く能力。」の意味を持つことから、知覚的な意味と認識的な意味の両義を持つ語であり、その多義性も社会・物理的世界と認識世界の間のメタファー的写像によってとらえることができるのである。

- (10) a. 新曲がヒットしたので、今年の収入は大幅に増えると見られる。
b. 眼力

2.2 法助動詞の意味・用法

法助動詞の多義性についても Sweetser (1990) は社会・物理的世界と認識世界の領域間のメタファー的写像としてとらえ、その多義性を小気味よく解説する。(11ab)の“may”はそれぞれ日本語では「～してもよい」「～かもしれない」に対応し、(12ab)の“must”は「～しなければならない」「～にちがいない」に対応するが、「～してもよい」と「～しなければならない」は社会・物理的世界という領域での主体と事態との関係性を表し、それと類似的な関係性が認識世界という領域でも引き継がれているという写像関係でとらえることができる。英語や後に見るようにインドネシア語ではこの種の法助動詞は多義的であり、解釈領域で区別されるが、日本語のこの種の法助動詞はそうではなく、上のように形式的に区別しなければならない。

- (11) a. John may go.
b. John may be here.
(12) a. You must come home by ten.
b. You must have been home last night.

“may”は社会・物理的世界という卑近で具体的な領域では「主体は権力によって行為を妨げられてはいない」状態を示すとすると、認識世界では「私は(私の前提によって)～と結論づけることを妨げられてはいない」状態であると解釈され

る。また、“must”は、社会・物理的世界では「直接的な力が主体に行為を強制する」状態を示すとする、認識世界では「（入手できる（直接の）証拠が）私に〜と結論づけるように強制する」状態であると解釈され、前者にはしる気持ちや憤慨する気持ちがうかがえるのに対して、後者にはそれがないことも説明可能である。

さてインドネシア語に話を向けると、“mungkin”という副詞がちょうど“may”に対応し、社会・物理的領域と認識的領域の解釈を有する。また、“harus”という副詞がちょうど“must”に対応し、社会・物理的領域と認識的領域の解釈を有する。

3 「ちょっと」

小数量を表したり、小程度を表したりする副詞「ちょっと」は多義的であり、日本語教育の現場で頻繁に話題に上る項目である。中田・有田（2006）は Sweetzer 氏の領域間のメタファー的写像のようにそれを分析したものである。すなわちメタファー的写像による意味拡張としてその多義性をとらえた³⁾。

3.1 少数・少量、小時間、小程度

「ちょっと」が少数・少量あるいは小時間を表す数量副詞の例はそれぞれ (13abc) (13d)、小程度を表す程度副詞の例は (13e) である。これらはすべて物理的世界での解釈である。ここでこれまでのように「社会・物理的世界」と書かずに、「物理的世界」に限定したのは理由があるが、その理由は後述することにする。

- (13) a. ごはんがちょっと残っている。
 b. おこづかいがちょっとしかない。
 c. ビールをちょっと飲んだ。
 d. ちょっと待ってください。
 e. 今朝はちょっと寒いねえ。

インドネシア語では少数・少量には“sedikit”、小時間には“sebentar”、小程度には“sedikit”といった副詞が対応する。これらの語の冒頭の形態素 se- には「一」の意義があるので、便宜的に「一」を表す副詞類と呼んでおく。

3.2 対話相手の心理的負担を軽減：依頼や勧誘表現

さて、日本語には対話相手の心理的負担を軽減するために「ちょっと」が使われることがある。(中田・有田 2006)

- (14) a. ちょっとお金貸してくれませんか。
 b. ちょっとフライパン貸してくれませんか。
 c. ちょっとお茶でも飲みませんか。

(14a) の「ちょっと」を (13abc) のように物理的世界における少量と解釈することは可能である。しかしながら、少量でなくても (14a) が可能であり、その場合、相手の心理的負担を軽減するための方策として使われている。その方策は「少量」の負担であれば、相手に受け入れてもらいやすい傾向があることから生じたものである。Leech (1983) の「相手の負担を最小限にとどめ、利益を最大限にする」という公理 *Tact Maxim* から対人関係でとるべき態度であることは間違いがない。日本語はどうもこの種の用法を発展させているようである。(14b) では数量の解釈はもはや存在せず、被依頼者の心理的負担を軽減するためにのみ用いられていると考えるほかない。(14c) は相手の心理的負担を軽減する解釈と「小時間」の解釈のどちらも可能であるが、その方策は (14a) と同じで「小時間」なら「相手の負担」が軽いからとられたと考えられる。

インドネシア語ではこの種の「ちょっと」を “*sedikit*” や “*sebentar*” や “*sedikit*” といった「一」を表す副詞類で表すと、文字通りの小数・少量、小時間の解釈のみで、相手に対する配慮の解釈がない。他の言語におけるこの種の副詞については中田・有田 (2006) で触れているので、参照されたい。

3.3 話し手の心理的負担を軽減：断りや自慢

実は (14) のように対話相手に行為を実行してもらう場合、「ちょっと」は相手の心理的負担を軽減すると同時に、話し手である依頼者や勧誘者の心理的負担も軽減している。いわゆる「ためらい」としてとらえることもできる。話し手自身が行為を行う場合は話し手の負担を軽減する解釈のみが成り立つ。

- (15) a. インドネシア語の辞書ありますか。インドネシア語はちょっとありません。

- b. (用事を頼まれて) ちょっと無理ね。
- c. (日曜日に買い物に行かないかとさそわれて) 日曜日はちょっと。
- d. あのう、ちょっとベンツを買いまして…
- e. (あの人はどんな人かと問われて) あの人はちょっと。

(15abc) のような「断り」や (15d) のような「自慢」をするときは話し手はある程度心理的な負担を強いられる。少なくとも日本語でその行為を行うときは相当の心理的負担を負うことになる。そんなとき「ちょっと」を用いるとその負担を少しでも軽減できるのである。(15e) のように言いにくい否定的なコメントをするときも心理的な負担を強いられるので、「ちょっと」でそれを軽減していると考えられる。

インドネシア語の「一」を表す副詞類は聞き手の心理的負担を軽減することができないのと同じように、話し手の心理的負担を軽減することはない。(15e) の状況で、インドネシア語の“sedikit”では否定的コメントが後続するという読みがない。しかしながら、面白いことにそれに対応するスندا語（ジャワ島で話されている方言）の“rada”という語ではその読みが可能である。（断りや自慢の場合はインドネシア語と同様に無理である。）否定的コメントをすることは日本人と同様にスندا語話者にとって心理的に負担となるようである。

前節の議論では社会・物理的世界という領域と認識世界という領域の二つの領域間のメタファー的写像を見てきたが、「ちょっと」の多義性はどれもそれらの領域間のメタファー的写像がもたらす意味拡張によるものではなさそうである。すでに、少量・少数、小時間、小程度を表す「ちょっと」は物理的世界での解釈であると述べたが、対話相手や話し手の心理的負担を軽減する「ちょっと」は社会的世界という領域で解釈されると考えられる。社会的世界には会話の参与者である話し手と対話相手が存在し、その両者の心理的負担を軽減する「ちょっと」の用法があるということである。これまでは現実世界＝社会・物理的世界とされていたが、別個の独立した解釈領域と考えることで日本語の「ちょっと」の意味拡張をとらえることができるということである。また、中田・有田（2005）が指摘するように、話し手の対話相手の心理的負担を軽減する社会的な「ちょっと」が物理的なそれと同様に幼児の言語獲得の早い段階で使用されることを考える

と、社会的な世界と物理的な世界のどちらも卑近な「現実世界」であるとする基本的な考えと矛盾はしない。

3.4 基準以上

領域間のメタファー的写像による意味拡張とは考えられないが、「ちょっと」の意味には、ある基準より少し程度が甚だしいということを表す場合がある。

(16) a. ちょっと辛いよ。

b. 今日はちょっとお金があるんだ。

(16a)は「辛さ」の程度が小程度であるという意味を表しうるが、その他に「通常よりは少し辛い」という解釈も可能である。実際に「お金」が少量の場合は、「あまり～ない」のように否定的に表現するだろうが、(16b)のように言うと、「いつもよりもお金を持っている」という意味になる。この種は何らかの基準が文脈で設定されたときに起こる語用論的な意味拡張ととらえることができるだろう。インドネシア語の「一」を表す副詞類にはこのような意味拡張がない。おそらく「一」という数詞が副詞類の一形態素であることに帰因する。「一」はゼロを基準とした目盛りの「一」＝「小」を指す方が自然であるから、この種の意味拡張はないと考えられる。

4 「している」

最後に「している」形式の多義性について考えてみる。

4.1 基本的意味と派生的意味

「している」形式の基本的意味と派生的意味については工藤 (1982) にまとめられている。この形式は基本的に「継続」を表し、(17a)のように動作の局面が取り立てられれば、「動きの継続」を表し、変化の局面が取り立てられれば、「変化の結果の継続」を表す。

(17) a. 廊下を先生が歩いている。

b. 玄関の戸が開いている。

インドネシア語では (17a) のように「動きの継続」を表す場合は継続を表す

副詞“sedang”を用い、(17b)のように「変化の結果の継続」を表す場合は過去を表す副詞“sudah”を用いる。

工藤氏は「している」形式には基本的な意味の他に、そこから派生した「反復」「現在有効な、過去の運動の実現」「単なる状態」の3つの派生的な意味があると解く。それぞれ順に(18abc)に対応する。

(18) a. 私は毎朝6時に起きている。(反復)

b1. (新聞を読みながら)また中学生が先生をなぐっている。(現在有効な、過去の運動の実現)

b2. あの人は前に一度結婚している。(同上)

c. 太陽は地球から遠く離れている。(単なる状態)

事態が反復的になったり習慣的になったりすれば、事態が状態性を帯び、(18a)のように「している」形式が用いられると考えるのは自然である。また、(18c)はいわゆる「第四種の動詞」(金田一 1976)で、変化の結果生じた状態ではなく、単なる状態を表している。この二つのように派生的な意味がすべて状態性に向かっているのなら簡単に話は丸く収まるのであるが、(18b)はそうではない。

(18b)の事態は過去時に生起したものであるのに、「している」が使われている例である。(18b1)は「過去に実現した運動が、記録として現在残されていることを表している」例であり、(18b2)は「過去に実現した運動が現在の状態になんらかのかかわりをもっていることを表している」例である。(p. 78)前者は「記録」と呼ばれ、出典を明示する「～によると」「～のなかで」とよく共起する。後者は「過去の用法」と呼ばれ、過去を表す副詞「これまでに」「とくに」「前に」「この間」などと共起する。この用法は「基本的意味の『変化の結果の継続』から派生してきたもの」(p. 79)と考えられ、「基本的意味においては、以前に実現した一つの運動の変化の側面が継続していることの方を問題とするのに対して、『現在有効な、過去の運動の実現』の場合には、以前に実現した運動そのものが問題になっていて、『変化性』もそしてその『継続性』も問題となっていない」(p. 79)と工藤氏は説明する。

4.2 動作パーフェクト

さて、ここで本稿の考えにもとづいて「している」形式の2つの基本的意味と3つの派生的意味を当てはめてみると、基本的な意味の「動きの継続」および「変化の結果の継続」は社会・物理的世界（現実世界）での事態が描写されていると考えられる。この場合は継続性を取り立てられる。また、派生的な意味のなかで「反復」と「単なる状態」も同様に社会・物理的世界での事態を描写していると考えられるだろう。どちらも一時的な状態が習慣化したり、常態化したりするという状態性という連続体に位置づけることができるからである。

と考えると、「現在有効な、過去の運動の実現」を表す「している」形式は派生的用法のなかでも特殊なものだと考えられる。この用法には動作動詞と変化動詞のどちらの例も見られるが、変化動詞の方はまだしも「変化の結果の継続」から変化性や継続性が希薄になり、「結果性」＝「パーフェクト性」だけが残されたのだと予測することは可能である。しかしながら、動き動詞の方はもともと変化性がないのであるから、「動きの継続」から継続性が希薄になると「動作性」しか残らない。

このような疑問を解決するために工藤（1995）では「動作パーフェクト」という概念が導入されている。「動作パーフェクト」は「状態パーフェクト」と対立する概念である。「状態パーフェクト」は定義上「結果継続」と同じであるので、結果性と継続性をもつパーフェクトであるのに対して、「動作パーフェクト」は継続性を持たず、その運動が実現するに伴う偶然的な間接的な「効力」、広義の結果性を持つとされている。

本稿では工藤氏が「動作パーフェクト」と呼ぶ事態を認識的世界という領域内の事態であると考え、工藤氏は現在テンスの動作パーフェクトの「している」と過去テンスの「した」の違いについて次のように記述している。

(19) シテイルでは、過去の出来事を現在と関わらせるにあたって、〈論理性＝解説性〉を前面に出すことがあるが、シタはそうはならない。シタは日常会話で用いられ、シテイルは、論述的な会話、文章にあらわれる。(p. 142)

本稿の考えに照らすと、この種の「している」は社会・物理的世界（現実世界）では過去時の事態を描写しているのであるが、思考や論理的な推論などを現在ま

さに行っているときには、社会・物理的世界とは一旦切り離し、認識的領域でその事態を認識していると言い換えることができる。仮にこれを「している」の認識的用法と呼んでおく。

工藤氏の興味深い観察は、「話し手の現在の判断を根拠づける（話し手の判断の理由＝推論の前提となる）過去の出来事をさしだす場合」と『『なぜか』『真実かどうか』など、話し手が現在問題とし、聞き手に説明、解答をもとめている過去の出来事である場合』にこの種の「している」がよく使われるという言語事実の発見につながった。（pp. 143-144）

（20）は前者の例である。確かに（20a）では過去を表す副詞類「昨年」や（20c）では「4月には」によって過去時の事態であるし、（20b）では「証言記録」ゆえに過去時の事態であるのに、現在時制の「している」が用いられている。判断の根拠となる事実は社会・物理的世界に過去に存在したものだが、その事態がその世界から遊離し、認識世界で結論づけたり、判断の結果を出したりするために用いられていると考えられないだろうか。

（20） a. 足利の叔父は昨年死亡しております。暁子が足利に行く理由はありません。

b. 「そうだよ。この事件でも、犯人が女ではないかという先入観がある」
「それはもう、間違いありませんよ。被害者は、昏倒する直前に、あの女がいた、と洩らしている。エレベーターガールが、はっきり証言しています。とにかく、この事件には、女の匂いがプンプンする」

c. しかし4月には結婚届を出しているし、外務省から旅券をもらっている。腹の中ではポールのところへ行く決心をしていたのではないかね。

（21）は後者の例である。確かに（21a）では過去を表す副詞類「今年の4月」や（21b）では「今年の2月7日」によって過去時の事態であるし、（21cd）では「証言記録」ゆえに過去時の事態であるのに、現在時制の「している」が使われている。社会・物理的世界に存在した過去がその世界から抜き出され、認識世界に持ってきて、その事態をめぐる、聞き手に疑問を投げかけている。話し手の認識世界ではその過去の事態はまさに現在進行形の思考の対象と考えることができないだろうか。

- (21) a. ところが証人は今年の4月、本犯罪の2か月前、厚木から長後町へひっこしている。なぜですか。
- b. それではききますが、今年の2月7日に梶原君は西鉄の定期券を買っているんですがね。あなたはそんなことを聞いたことがありませんか。
- c. 前回の公判でのヨシ子の証言によると、あなたにはヨシ子に向かって、宏がハッ子に惚れてると言っている。どっちがほんとうなんですか。
- d. 一昨日、東都デパートで、城崎達也が殺されている。その直後に刑事があなたをお訪ねした。あなたは、城崎氏を知っているかという質問に対して、聞いたことのない名前だと答えている。いまでもそうお考えですか。

この認識的用法をインドネシア語と対照すると面白い。日本語では(20)(21)の下線部を過去テンス「した」にしても構わない。すでに述べたようにインドネシア語で過去を表す副詞は“*sudah*”であるが、この文脈をインドネシア語に翻訳するときにはこの副詞を使うことができない。(20)(21)の下線部を含む過去の事態を単独で描写するときにはこの副詞を使うことができるのにもかかわらずである。おそらくこの副詞は社会・物理的世界においてのみ時制を表示することができる副詞であるが、認識的世界においてはそれができないのだと考えられ、インドネシア語でも社会・物理的世界と認識世界を区別していると考えられる。

5. 終わりにかえて

冒頭で書いたようにメタファーは経験的な学習によって身につけられるものである。幼児の言語獲得期から年月を経た我々は言語獲得期に刺激的だったメタファーによる認知、それによって言語の世界が広がっていったことなどすでに忘れ去っている。私にはこの種の研究はもう一度そのときの感動を取り戻す作業でもある。

本稿では過去に考察した「ちょっと」について現段階の考えのなかで整理しなおした。また、「している」については最近考えていることを形にしてみた。これについてはまだ十分に精査していないところがあるが、インドネシア語など他の言語との対照研究でさらに明示的にしめすことができるのではないかと考えている。

最後に、ほかにも様々な言語現象に我々がその感動を忘れ去ったメタファーが潜んでいるはずである。再発見が望まれる。

注

- 1) この講義は前日の平成 24 年 10 月 24 日にインドネシア教育大学 (UPI) 大学院で行われた The Fourth International Seminar on Japanese Linguistics and Japanese Language Education での講演「『のだ』の意味構造の構築に向けて」で用いた概念の基礎を導入するために行ったものである。ここに講演および講義でお世話になった Wawan Sasumita 先生と Dedi Sutedi 先生をはじめとする UPI の先生方に感謝の意を表したい。
- 2) インドネシア語の用例については大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻日本語日本文化専修コース博士後期 3 年の Yuliana Lukanto 氏にご教示いただいた。ここに感謝の意を表したい。解釈等に関して誤りがあるとすれば、その誤りはすべて筆者の責に帰するものである。
- 3) 他の「ちょっと」の用法として「ちょっと、あんた。～しないでよ。」のような注意の用法もあげられるが、本稿では簡潔な説明を心がけているために触れていない。おそらくこの用法は発語行為という領域に関わり、注意などといった相手との関係上負担のかかる発語行為を行うにあたり負担を軽減するために使われるものであり、発語行為領域に意味拡張された用法であると考えている。

引用文献

- 金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 麦書房
- 工藤真由美 (1982) 「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』 13-4
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間と表現—』 ひつじ書房
- 中田一志・有田節子 (2005) 「発達段階における対人的表現「ちょっと」についての覚え書き」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』 第 13 号
- 中田一志・有田節子 (2006) 「社会的領域における会話の参加者の負担軽減について：「ちょっと」の分析を通して」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』 第 14 号
- 松本曜 (2000) 「日本語における身体部位詞から物体部分詞への比喩的拡張：その性質と制約」坂原茂編『認知言語学の発展』 ひつじ書房
- Leech, Geoffrey (1983) Principles of Pragmatics. Longman.
- Sweetser, Eve (1990) From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure. Cambridge University Press.

〈キーワード〉 認知、メタファー、意味拡張、身体部位詞、「ちょっと」、「している」

Rediscovery of Metaphorical Expressions in Japanese

Hitoshi NAKATA

This paper aims to overview ways in which human beings capture things by metaphor and diversities of capturing them between languages, and to observe several language phenomenon originated by metaphor. The metaphorical expressions, such as words with body parts, an adverb *chotto* and an aspectual form *-teiru*, are mainly deal with.